夢くじ

雨音多一

1

　夢はいつ見るのかが問題だ。昼か夜か。夢を見る時間より、さらに人生のどの時期に見るのかが問題なのである。人生の若い時に見る夢は、力強いが儚いものである。人生の盛りを迎える二十・三十代の時の夢は、一番実り多いものであろう。

「ねぇ、結婚式を挙げたいんだけど」
　好江がそう切り出した。

　荒川好江は三十二才のブライダル・フォトグラファーだ。今付き合って同棲している男性――田沢朝次にそう言い寄ったのだ。
「お金があればねぇ」
　田沢朝次は、アップルジュースを、ガラスコップに注ぎながら、そう答えた。
「大体さぁ、今なら家族だけの食事会でもいいんじゃないか」
「フタコト目にはそれね」
「もう行かなきゃ」
「……うん。いってらっしゃい」

　朝次は席を立つと、作業着をはおった。勤め先の部品工場には、いつもこの時間に出発するのだ。八時十五分きっかり。会社までは軽自動車で十分。八時半の始業である。

2

　その日の帰り道のことだった。スーパーマーケットの近くで「宝くじ」ののぼりが朝次の目に留まった。

　―――今日は、大安か。
　車をスーパーマーケットの駐車場に停める。

「いらっしゃいませ」
「あの、今売っている宝くじありますか」
　朝次はドリーム・ジャンボの宝くじしか買った事がなかった。今、売り子が次々のに宝くじの紹介をするのに戸惑ってしまう。
「どれにしますか？」
「ええと、これ下さい」
　朝次が選んだのは、スクラッチのくじだった。その場で削る。
「……ハズレか。当たるわけがないよな」
「ありがとうございました」
　売り子が残念そうな表情で、見送った。
「またどうぞ」
「また来るよ」

　朝次はそのまま家に帰り着いた。
「ねぇ、今朝の話だけど……」
　先んじて帰っていた好江は、またそう切り出した。
「結婚式のこと？」と朝次。
「うん。お金のコトとか、何も考えていないでしょ」
「いや、ちゃんと考えているよ」
「どう考えているの？」
「今日だって……」
「今日だって？」
「ちゃんと、宝くじ買ったよ」
「宝くじ？」好江の声が裏返った。
「そう。ハズレたけどね」
　そう言うと、朝次は屈託なく笑った。
「全く、もう」
　その言葉に、思わず吹き出してしまう、好江だった。

「今日の結婚式、演出が凄かったの」
　好江がデジタル一眼レフをテレビに繋いだ。いつも、その日撮った写真を大画面テレビで確認するのだ。ブライダル・フォトグラファーの癖である。

「コレよ、このドライアイス」
　画面に映しだされたのは、新郎新婦の二人がドライアイスの煙の中で、ウェディング・ケーキに向かうシーンである。
「ちゃんと見てる？」と好江。
「見てるよ」と朝次。
「ココがスゴかったの」
「そうだね」
「もう」

　結婚式場に行くたびに、好江は切ない気持ちになるのだ。それは今にはじまった事では無かった。
「レストラン・ウェディングで良いんじゃないの？」
「披露宴をしたいのよ」
「どうしても？」
「うん」

　画面がチャペルから出てのブーケトスに変わった。ブーケを出席者の方へ放るのだ。一番写真のテクニックが要求さ

れるシーンの一つである。
「あー、失敗かー」
「ここだけは、仕方がないよ」
「うん」
「あ、手ブレはしてない」

　次は室内の場面だった。二枚目のメモリーカードから見たので、順番が逆になっていたのだ。室内では、必ずストロボをたく。露光量が少ないと手ブレを起こし易い為なのだ。
メモリーカードを変えた。昨日撮った写真が映し出される。

「ここは、お袋さんが一番嬉しいだろうな」
「そうね」
　いつの間にか、朝次はくい入るように画面の写真を見つめていた。
「花束贈呈か。手紙の朗読もいいな」
「この辺は定番ね」
「これこれ、この朗読のシーンがいいんだよ」と朝次。
「必ず入れようね」

　そうしているうちに小一時間が過ぎた。フロ先に入るね、朝次は席を立った。
　――いよいよ結婚か。

　また考えを巡らせてしまう好江だった。

3

「また来たよ」
「あら、いらっしゃいませ」

　三日後のことだった。朝次は、スーパーの宝くじ売り場を訪れていた。
「今日は当たりそうな気がするんだ」
「私もそう思うわ」頷く売り子。
「この宝くじは？」
「それは一等２百万円よ」
「これにするか」

　朝次は息を整えて、スクラッチを削った。
「ハズレか。当たるわけがないよな」
「残念だったわね。またお越しください」
「また来るよ」
「またね」
　その日の朝次は、ツイていないようだった。

「今日は午前中だけの仕事だったの」
「半ドンか」
　仏滅の水曜日のことだった。日が悪いので、好江は今日は「前撮り」という神社での撮影だけだった。衣装を変えて、二回撮影があった。
「今日は前撮りだったの」
「そういう日もあるね」
「うん」

「格好いいなぁ」
「烏帽子っていうのかしら」
　また二人で、今日撮った写真をテレビで眺める。
　画面には、厳格な感じの神社を背景に、新郎新婦の並んだ姿が映っていた。
「コレ、衣装借りるの幾ら掛かるんだろう？」
「今度、訊いてみるね」
「頼むよ」
「中には、前撮りだけ早く撮影する人もいるの。披露宴の前にね」
「それも良いね」
「あとは、アルバムね」
「ああ、アレでしょ。写真を貼って結婚式を振り返るヤツ」
「定番アイテムね」
「結構かかるの？」
「うん」
「お金があればねぇ」
「少しずつ貯めましょ」好江がさとした。
「それしか無いか」
「当たり前よね」
「そうだな」と朝次は頷いた。

　夢があることは良いことである。お金が無いのは、良いこととは言えないかもしれない。今の二人にとって、夢を叶えるには、お金が必要なのだった。多分、夢とお金は一致したものなのだった。

4

　その週の土曜日のことだった。
「好江、話がある」
　朝次はそう切り出した。
「何？　どうしたの？」
「実は……。当たったんだ、宝くじ。二百万円……」
「本当？　ウソでしょ」
「……本当なんだ。ほら、これ」
　朝次が差し出したのは、新しい通帳だった。好江はそれを受け取って中を見た。
「本当に、二百万円……」
「俺、これで車を買おうと思う」

　沈黙がおこった。好江がキッと朝次をにらんだ。
「結婚式が先よ」
「車が欲しいんだ。軽自動車ではない、白のコンパクトカー」
「いい加減にしてよ！」
「いいだろ。俺が当てたんだから」
「いいわけ無いでしょ。結婚式で、みんなに認めてもらいたいの」
「もう止めてくれよ。自動車を買うよ」
「……知らない！」

　口論はそれで終わった。朝次は通帳をもって玄関へ向かった。
「出かけてくる」
「本当に知らないから！」

　それから一時間後のことだった。好江の携帯電話が鳴ったのは。知らない番号からだった。
「……はい、もしもし？」
「荒川好江さんですか？」
「はい、そうですが」
「私、置賜市立病院の救急班のものです。あの、田沢朝次さんが、自動車事故で救急搬送されました」
「本当ですか！？」
「はい」
「朝次は大丈夫ですか！？」
「目立った外傷はありませんが、乗っていた軽自動車は大破しました」
「良かった……。命が助かって」
「こちらに迎えに来ていただけないでしょうか」
「もちろんです。今すぐ行きます」
「お気を付けて」
　好江は身支度を整えると、病院へと急ぎ向かった。

　好江は救急処置室の前の長椅子に座った。大丈夫だろうか、と何度も辺りをうかがう。その時、朝次が処置室から出てきた。
「大丈夫！？」
「ああ、心配かけてすまない」
「怪我は？」
「かすり傷程度だ」
「良かった」
　好江は安堵した。
「体は大丈夫だけど、車が……」
「車買いましょ。白のコンパクトカー」
「……ありがとう」
「うん」
「好江……」

「何？」
「結婚してくれないか」朝次はそう告げた。
「何よ、こんな所で。ムードが無いのね」
「すまない」
「良いわよ」
「ありがと。あと、車だけど……」
「明日、買いに行きましょ。私も休みだし」

「ああ」

5

　次の日の事だった。日曜日の午前中に、二人は揃って車のディーラーへと赴いた。六月の風が心地よく頬を撫でる。

「……すると事故で？」
「そうなの、車がダメになっちゃって」好江が苦笑いする。
「この車がいいと、前々から思っていたんです」

　ディーラーの営業マンは笑顔で話を聞いてくれた。何度も、そうでしたか、と相槌を打つ。
「そう、宝くじで当てたお金が、宙に浮いちゃったの。本当は、披露宴をする予定だったのだけれど……」
「本当に、残念なんですが……」と朝次。
「できますよ、披露宴」
「え？」思わず好江は顔をあげた。
「できるって？」朝次が尋ねる。
「会費制といって、前もってご祝儀の金額を決めておくんです。一人三万円とか。私が育った北海道だと、結構そうしているカップルも多いですよ」にこやかに、車の営業マンが教えてくれた。
「そうなの！？」
「初めて聞いたよ」
「もし良かったら、この会費制をしているこの近くのウェディング・プランナーを紹介しましょうか？」

　それから私たちふたりは、会費制で結婚式を挙げた。二人とも、すこぶる満足だった。
　夢はいつか醒めるものかも知れない。だが次の夢を持つことは出来る。夢を見続けることは、夢を追い続けることである。だから、ひとつの夢を失ったとしても、「次の夢」を見続けることが、重要なのだろう。
　そう、人生とは夢かもしれない。それは「胡蝶の夢」ではない。「一睡の夢」でもない。生きてみる夢、起きてみる夢が現実を変えるのだ。それは理想に似ている。現実を変える夢こそが、「本当の夢」なのだろう。

（結）

夢くじ

http://p.booklog.jp/book/128890

2019年11月10日　初版

著者：雨音多一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/128890

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：デザインエッグ株式会社